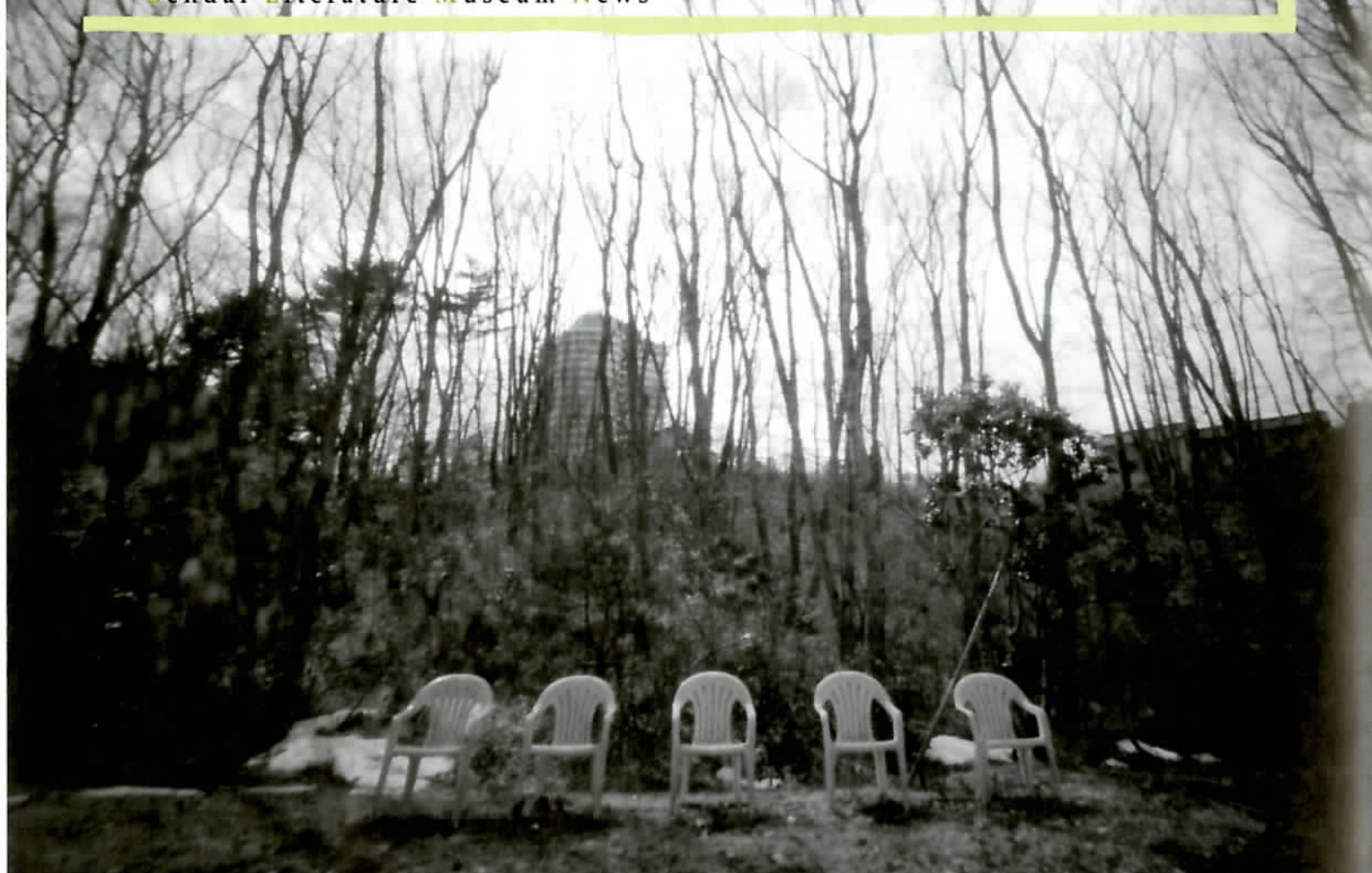


仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第七号



ことばとその周辺

第七回

仙台周辺で広く文学にかかわる活動を取り組んでいるグループを紹介するコーナーです。

出版社「本の森」

東北・仙台で書き手を発掘し、著作を全国に発信する

「本の森」は、仙台で出版の拠点として、全国に発信できる「本の苗床」を育てています。一九九七年に仙台に誕生した出版社「本の森」のホームページの冒頭には、こう謳われています。



編集長の大内悦男さん(左)と小林直之さん

それが本の森の出版基準だ。持ち込み原稿が多く、地名や苗字をテーマに次々とヒット作を生み出す「常連」の著者もいる。

「書き手を選ぶ、というとお客がから本を出した多くの著者の方々が支えられているのも当然。その方々に申し訳が立たなければ「本の森」の出版物として胸を張れるように、きちんと編集の手を入れることを心掛けています」

企画・編集から営業まで、本づくりのすべてに取り組んでいるのは、かつて地域紙の記者だった大内悦男編集長と、東京で四年間、専門誌の編集に携わっていた小林直之さん。二〇〇四年には、二人で十六点の本を書店に送り込んだ。この他にも、大学の教科書や私家版など、一般書店には並ばない本も二人でこなしているというから、その忙しさは想像以上だ。

東北在住者の著作、あるいは東北に根ざしたテーマの本であること。今も時々メールで消息が届く。「何十年後にその中の誰か一人でもいいからこの業界に入るなら、うれいすね」と小林さんが微笑んだ。(下)



右が、大手取次の口座を開ききっかけとなった「井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室」(文学の蔵編)。「会津の武田惣角 ヤマト流合気柔術三代記」(池月 映著)は、全国から反響があった初版千部が完売、すぐに再版した

仙台市青葉区二番町一六一九六〇二 電話(〇二二)七二二四八八八

学芸室日記



前日は魯迅の学んだ階段教室などを訪問。仙台については「デートにびったりの街ですね」

「文学のある風景」では、佐伯一麦さんを訪ねました。高台にあるお宅のリビングからは、遠く太平洋を望むことができ、執筆に疲れると、ここから海を眺めたり、本を読んだりするそうです。よく読まれるのはゴッホの書簡集や作家(特に小沼丹)のエッセイですが、時には図鑑や画集なども。今回の受賞はまさに青天の霹靂だったという佐伯さん、「群像」に連載中の「ノルゲ」を完結させた後には、単行本の書き下ろしなどが控えているそうです。久々に短編も書きたいとのこと。これからの活動も楽しみです。



仕事場の本棚もぜひ拝見したかったのですが……またの機会に

を読んだのがきっかけ。「これなら自分にも小説が書けるかもしれない、今にも書けそうだし」と思ったそうです。「歴史の中に埋もれた、個人の生き方、生き様」に目を向け、「自分の内面」「アイデンティティ」といった個人の視点をおし、歴史を見つめようとするキムさんのお話は、翻って日本文学の歴史と現在についても、いま一度考えさせてくれるものでありました。

三月六日、第五回詩のボクシング宮城大会が開かれました。優勝者は仙台出身で盛岡



優勝した後藤さん(左)と準優勝の熊谷さん

市在住の教師、後藤・峰さん(31)。三日目の挑戦で栄冠を手に入れました。惜しくも準優勝となったのが、泉区在住の熊谷光樹さん(43)。映像作家でもある熊谷さんは、第一回大会から毎回必ず勝ち上がる実力派で、第二回大会準備の経歴も「今回こそは」と、ご本人も周囲も期待していたのですが、決勝戦は四対三で涙をのみました。打ち上げの席で熊谷さんは「当初の目的は十二分に果たせました。一区切りです」と語っていました。本当に、お疲れ様でした。

与謝野寛・晶子展

日本の近代詩歌の世界をさりひろき、新しい時代の若い魂を揺さぶった寛と晶子。歌の世界を超えて、二人が築いた大きな足跡を、日本近代文学館の貴重資料より紹介します。

第1期 4月16日(土)～5月22日(日)
第2期 5月28日(土)～7月3日(日)

※1期と2期では展示資料が異なります。

紙人形

職人の仕事を説明するときによく使われる言葉に、「段取り八分」があります。仕事全体を何十回となく繰り返して吟味して、頭の中にその細部を思い浮かべながら必要な材料をあれこれ取り揃え、下拵えに万全の工夫をつける。ここまででもう八割方、仕事が済んでしまっているんですね。というよりも、実際の作業をはじめる前に、これだけの段取りをつけていなければ、たぶんその仕事は失敗に終わるだろうというのが、この「段取り八分」のほんとうの意味なのでしょう。

戯曲を書く仕事でも段取りが大事です。わたしの場合は、紙人形をつくるのが第一の段取り。栄養剤の空箱で作った三角錐に出演俳優の顔写真を貼りつけ紙人形にして役名を書き込む。最新作の「円生と志ん生」でいえば、角野卓造さんの顔写真を貼った人形に「五代目古今亭志ん生こと美濃部孝蔵」と書き込む。もちろん出演俳優のみならず全員の紙人形をこの方式で作って机の上に並べ、毎日、何時間でも、ああでもないこうでもない動かし続けている。そのうちに紙人形に生命のようなものが宿り出して勝手に動きはじめます。

こうなればもうしめたものです。その動きを細大洩らさず記録して、筋立てをつくることになりました。戯曲が書き上がったあと、この紙人形はどうか。俳優さんの写真を焼いたり捨てたりするわけには行きません。ましてや、紙人形たちには生命が宿っていますから、そんな気がして仕方がないものですから、簡単に処分はできません。そこで書き物机のいちばん下の大きな引き出しに仕舞っておくことにしていました。ところが、この二十一年間に、その紙人形が百体を超えて、とうとう引き出しが閉まらなくなりました。さあ、困った。別の容器物を用意しようか、それとも供養祭でもやって焼いてしまおうか、どうしようか。思案投げ首のところへ、副館長さんや学芸員のみなさんが助け舟を出してくださいました。

「ここへ持ってこれたらどうですか。保管してあげますよ」
そういうわけで、わたしの大切な紙人形たちは近く、永住の地である仙台文学館へまわって旅立つ予定です。

仙台文学館

館長 井上ひさし

仙台文学館ニュース 第七号

仙台文学館 Sendai Literature Museum

仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.lit.city.sendai.jp/hp/index-sml.htm

【表紙針穴写真撮影】黒田 カツオ 【本文挿画】古山 拓
【編集・印刷】(株)ユーメディア

『与謝野晶子歌集』



『与謝野晶子歌集』
与謝野晶子自選
岩波文庫

ここしばらく、岩波文庫版の晶子歌集が、机上のスタンド横に置かれたままだ。

表紙は、手擦れのあとで茶褐色となり、一方が捲れあがっている。加えてあちこちに挟まれている色とりどりの付箋。

奥付を見ると、一九八三年四月一〇日発行、第三十六刷との記載がある。ちょうど、二十二年前に刊行された一冊。購入したのは、たぶんその頃だろう。

与謝野晶子には、少女時代から関心があった。彼女の生地である現在の大阪・堺市は、かつて泉州と呼ばれ、私の生まれ故郷である紀州、和歌山市とは、地続き、隣町のような地にあたる。和歌山市から大阪市内まで電車で約一時間、大阪市内に至



る直前に急行が停車するのが「堺」駅だ。

「ああ、ここは与謝野晶子さんの生まれたところ……」

堺駅に停まるたびに、少女だった私は、そんな思いを抱いていた。晶子なる女性のほつきりとした輪郭を知らないまま、「堺の晶子」として、漠とした憧れを感じ続けていたのである。

歌人・晶子を意識し始めたのは、私自身が初めての歌集を出してからだ。

もし、一生、短歌をつくり続けるのなら、目標がほしい。遠い遙かな存在でいい、そのひとつの万分の一でも真似ができれば。そうした中で浮かびあがってきたのが、晶子である。

「歌人は短歌だけをつくっていても駄目だよ。歌を支える評論やエッセイ、歴史認識や社会への視点を示さなくてはね」

短歌の師である近藤芳美先生の言葉に、おおいに示唆を受けたのも理由の一つであり、

「その意味では、近代以降の女性歌人では、晶子が秀逸だね」その言葉にも、全く同感であった。

そうは言っても、晶子は、あまりにも大きな存在。どんなアプローチの方法があるのか。

迷いに迷った末、とにかくいい意味での晶子の「追っかけ」をすることに決めた。

まずは、大阪在住の地の利をいかして、堺市大筋にある彼女の生家跡をはじめ、鉄幹との出合いの場所である浜寺公園を訪れた。

母校である泉陽高校や「ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清滝夜のあけやすき」のゆかりの地である京都嵯峨にも足を運んだ。

また、思いがけない僥倖に恵まれ、鉄幹・晶子夫妻の末娘である森藤子さんに、お話をうかがう機会も得た。

いつからだろう。上すべりがちの「追っかけ」ではなく、地に足の付いた晶子探求へ。そんなふうに思い始めたのは――。

何度も何度も、嘗めるほど眺めつづいた晶子の年譜。年譜を目的にして、ある日、はっと気がついたことがあった。

・初めての歌集『みだれ髪』の刊行が一九〇一年八月。晶子・満二十歳の年。
・欧州旅行から帰国し、初めての評論集『二隅より』を出し、社会評論家として第一歩を踏み出すのが、一九一一年、三十三歳のとき。
・西村伊作の開校した文化学院の学監となり、教育者として新生面をひらくようになるのが、一九二二年、四十三歳の四月。

『みだれ髪』で歌人として出発した晶子が、十年毎に次々と新し

い自分を展開していく。はつきりと、その足跡を示す年譜。晶子の前向きで、逞しい行動力に、あらためて驚いたのである。

晶子の初めての歌集刊行が二十三歳。ちょうど十年遅れの三十三歳で初めての歌集を出した私。せん越ではあるが、遙かな目標を、十年遅れで、とほとほと辿るように歩いている。そんな思いから、自分の同じ歳の晶子の歌を、ことある毎に、読むようになった。

それにしても、中年の晶子の歌の何と寂しいことか。

御空よりなけばはつづく明き
みち半はくらき流星のみち
――『流星の道』



『流星の道』は一九二四年、晶子、四十六歳の春刊行の歌集である。今の四十代と晶子の時代とは、かなり年齢に対する意識が異なると思うが、あのパッションートな晶子が、このような心弱りを抱いていたとは、意外に映るほどの鬱屈とした思いの託された一首である。人生を空より続く道にたと

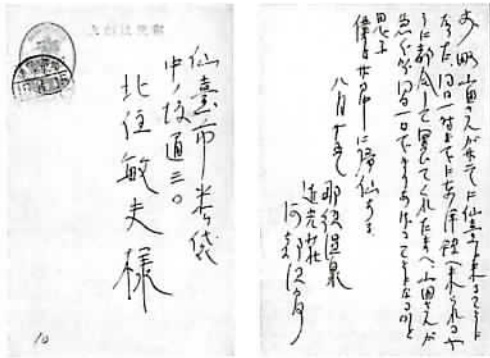
え、半分は明るい、半分は、「くらき流星のみち」だと歌う晶子。十年遅れで、彼女の後方を歩みつつある私には、この深い憂いが手にとるようにわかる。華やかで衝撃的な出発を遂げた者ゆえに背負わねばならない榮光に続く苦難の「みち」。それを晶子は正直に「くらき流星のみち」と表現したのである。

そうした彼女の歌集を手にしながら、最近次のような一首をつくった。

換気孔よりかそか洩れくる風の音よ晶子中年吐息のようなまさに、晶子の歌が、彼女の吐息そのもののように感じられたからである。



道浦母都子(歌人)1947(昭和22)年和歌山県生まれ。高校時代から短歌の創作を始める。早稲田大学在学中に歌誌『未来』に入会、近藤芳美に師事。1981年に歌集『無擾の抒情』で第25回現代歌人協会賞。短歌・歌人に関する評論やエッセイも手掛ける。歌集に『風の姫』『夕歌』『青みぞれ』、エッセイ集に『百年の恋』など。この4月、『道浦母都子全歌集』刊行。



阿部次郎はがき

渡部 直子 (仙台文学館学芸員)

前略 山田さんが廿二日に仙台に来ることに。なった。同日一時までに東洋館へ来る。一時間前に都合して置いてくれたまへ。山田さんが急ぐから同日一日できりあげることに。かと思ふ。僕は廿日中に帰仙する。八月十五日 那須温泉/近光荘/阿部次郎 (昭和十五年八月十五日消印)

これは三太郎の日記で知られる哲学者阿部次郎から、当時東北帝大の図書館に勤務していた国文学者北住敏夫宛てたはがきである。昭和十五年八月の阿部の日記には「午後より夜にかけて日記研究會(当番) (二十二日)午後引続き記

阿部次郎は、友人のドイツ文学者小宮豊隆と共に「芭蕉俳諧研究會」を発足させる。そこには先達の山田孝雄を中心に、英文学の土居光知、国文学の岡崎義忠、医学部の太田正雄(詩人・木下李太郎)ら、専門分野をこえた研究者たちが集った。会は芭蕉七部集の「猿蓑」から始められた。毎回担当の者は念入りな下調べをして発表し、それに対し私見を述べ合い理解を深める。雑学から専門知識まで多角的な視点から出される解

阿部は、友人のドイツ文学者小宮豊隆と共に「芭蕉俳諧研究會」を発足させる。そこには先達の山田孝雄を中心に、英文学の土居光知、国文学の岡崎義忠、医学部の太田正雄(詩人・木下李太郎)ら、専門分野をこえた研究者たちが集った。会は芭蕉七部集の「猿蓑」から始められた。毎回担当の者は念入りな下調べをして発表し、それに対し私見を述べ合い理解を深める。雑学から専門知識まで多角的な視点から出される解



阿部次郎 1883(明治16)年~1959(昭和34)年

様子は北住の記録などにより「思想」「俳句研究」「文学」といった雑誌や「芭蕉俳諧研究」などで披露された。研究会は時局の困難な時期も含め、昭和二十一年まで続いた。この何気ないはがきには、忙しい中にも互いの交流を通して、学が喜びを探求し続けた教授らの熱意が込められている。この姿勢が学都仙台の基盤を作ったこととは想像に難くない。

「小説家前夜」エンターテイメントをめざして

三浦明博

三浦明博さんは、二〇〇二(平成十四)年に『滅びのモノクローム』で第48回江戸川乱歩賞を受賞、作家の道に入られました。コピーライターのお仕事をなさりながら小説に取り組み、この大きな賞を受賞されたわけですが、なかなか苦勞があったのでしょうか。



最初に小説を書くころと思いついたそのときから、江戸川乱歩賞に応募したいと思っていました。だから私にとっては小説イコール江戸川乱歩賞なんです。三十六か七歳のころ、それから毎年、乱歩賞だけに応募して、五年目で運良く受賞できました。コピーライターといっても会社勤めではなく自営業です。

自由な時間が取りやすい。逆に、忙しいときには逃げ場がなくなるのですけれども。乱歩賞の締切は例年一月の末なので、追い込みの三か月、特に年末年始は辛い。仕事と創作の板挟みのまっただ中で、お正月には本当にいやな記憶しかありません(笑)。

コピーライター時代はどんなお仕事を?

三十歳で独立してから、新聞広告などを中心に、公共広告機構の森林保護をテーマにした広告や、佐藤忠良さんの彫刻をモチーフにした大手コンピュータソフト会社の広告を。広告以外でも、小学生向けの環境教育のソフトウェアに関わったこともあります。

小説を書き始める三、四年前のことですが、佐伯一麦さんにインタビューをしたこともあり、それはビールの新聞広告で、二十代で、仙台で活躍されているいろいろなジャンルの方々にインタビューする」というシリーズ企画の中の一回でした。



もともと文章を書くのが好きだからコピーライターの仕事を選んだわけですが、その頃はまだ小説を書くなんて思ってはいませんでした。今こそ、小説を書くということと広告のコピーを書くこととで、どこが違うのかは分かりません。でもその時は、自分とほぼ同世代なのに小説という別世界で文章を書いている佐伯一麦という存在がいること、そしてその佐伯さんにお会いしてインタビューすることが、何だかとても怖い感じがしたものです。

ミステリー小説を書くかと思っただけは、中学や高校のころから小説を読むのが好きで、大学に進んでからも色々読んでいました。開高健、安部公房……。どうもそのころ、「小説家になりたい」と口走っていた時期もあるそう

です。後に親から聞いたんですけれどね、本人は案外、憶えていないもので。そんな気持ちも少しはあったのかも知れないけれど、「ま、そんなのは無理だろう」とって、結局は広告の方に行っただけでしょうね、多分。

コピーライターになってからは、仕事に関係した資料などを読むことが多くて、小説からは少し遠ざかってしまいました。たまに、ちょっと話題になった作品を読むくらいでね。

それがある時、藤原伊織さんの「テロリストのバラソル」に出会った。それまではミステリーはあまり読んでいなかったんですけど、たまたま読んでみたら面白かったんです。それに、乱歩賞を取った作品が同時に直木賞も受賞したということが、意外だった。ミステリーなのに直木賞をね、と。自分も書いてみようかな、と。

例えば、安部公房のような小説を書け、といわれても、何を書



いたらいのかわからないでも、ミステリーは違う。まず何かの事件が起こる。そこに人間関係が発生して展開し、最後には犯人なり動機なりが突き止められる。解決の道筋は色々あるだろうけれど、何かしらの収束はある。これなら、その気になれば素人でも書けるんじゃないか、とまず思っただけです。

受賞するまでにはずいぶんこの苦勞が……。当時、精神的にちょっと行き詰まっていた時期でもありました。自分はこれまで、それなりに一所懸命やってきたつもりだ。例えば大学受験、会社勤め、独立……。でも、最後の最後の一線、どこか安易に流れている。それが自分で分かっていっています。三十六歳。すでに結婚して、小さい子どももいたので、簡

単に無茶が許される立場ではありません。でも、だからこそ、もしも何か無理してやり遂げようとするなら、多分、今が最後のチャンスなのじゃないかな、とも思っただけです。

そう考えると、この江戸川乱歩賞というのはとても難しい賞のようだから、頑張るに値するだろう。それなら、これ一本に絞って応募してみようと思っただけです。

素人が一年に二つも三つも書けるわけがない、一年に一本、毎年一月をめぐらさないとかなるんじゃないかな、と思っただけです。そうやってみて、三年頑張ってみよう。最後まで逃げないぞ。そうして本当に真剣に打ち込んでダメだったら、それはそれで納得ができる、と。

ところが三年目に、最終候補の五本には残ったんです。

結果はダメだったものの「あ、俺、もしかして才能あるかも」と勘違いして、そこが自営業の気楽なところとして、翌年は仕事そつちのけで作品に取り組んだのに、今度は受賞どころか最終候補にも残してもらえず。その時のショックと来たら、今でもときどき夢でうなされるくらいです(笑)。

最終候補に残るまでの三年間は、たとえて言えば穴ぐらに

じつと座って書いているのに近い状態。それまで味わったこともないくらい、精神的につらい状態でした。

それだけに、今でもこの、最終候補に残ったという連絡の電話はうれしい思い出です。受賞した時の電話よりもね。

小説家もコピーライターも同じ「書く」というお仕事。でも、ずいぶん違うのでしょうか。私も、小説を書き始める前は、「同じ文章を書くという行為なのだから、そんなに違いはないのかな」という気がしていました。広告と違って小説なら、自分の作品なのだから好きなことが自由に書けるのかな、というくらいで、ところがいざ書いてみると、それは全然違う。

小説の場合、要は好きなことを書いていけばよい。その代わり、書きたい何かがある中でなければならぬんです。

広告コピーの場合は、基本的には広告主の代弁です。我ながらおもしろいものを書いたつもりでいても、広告主が言いたいことを汲み取って書いているわけですから、中味は自分のものではない。

小説は、二作目か三作目あたりかな、最終選考に残った作品を書いた頃に、「ああ、これは面白い。こういうことならば、多分いくら書いても書きたい内容は

なくならないだろうな」と思いました。

広告の世界で仕事をしていると、自分自身の中から内容や表現がわき上がってくるのかのように感じたこともあったけれど、それは勘違い。本当は、書くという行為の技術的な部分を切り売りにして提供していただけたらいいんじゃないかと。また、広告コピーの場合は、明るく楽しいことじゃないと、面白くない。その点、小説、特にミステリー

というものは、人間の精神的な暗黒部分を書くこともある。そしてその暗黒部分は、いくら作りこむことは言っても、考えた自分、書いている自分自身の中に存在することなのです。

だから小説を書いていると、いつも発見があります。「ああ、俺にはこんな残酷な面があったのか」とか、「おや、こんなメルヘンチックなところもあるぞ」とか(笑)。(二〇〇四年十月三十日に行われたトークイベントをもとにまとめたものです)



三浦明博(みうら あきひろ) 1959(昭和34)年、宮城県築館町生まれ。明治大学商学部卒業後、仙台市内の広告制作会社でコピーライターとして勤務。1989年独立。2002(平成14)年に『滅びのモノクローム』で第48回江戸川乱歩賞を受賞。著書に『死水』(講談社)、『声』[乱歩賞作家 黒の謎』(講談社) 所収) など。

※「江戸川乱歩賞」とは1954(昭和29)年に江戸川乱歩の寄付を基金として制定された探偵小説奨励の賞で、ミステリー作家の登竜門。

「おてんとさんの世界展」関連イベント

「さとう宗幸 ヘキを語る」歌とトーク

歌とトーク / さとう宗幸 キーボード演奏 榊原光裕



「わずかな期間だけれど同じ時代に生きた僕たちの世代こそ、ヘキの名と作品を語り継がなければ、という使命感があるんです」とさとう宗幸さん

スズキヘキの大ファンで、その詩を多くの人々に伝えたいと自らのステージでも歌い続けているさとう宗幸さん。この日は、宗幸さんにとっても初の、仙台文学館での「ミニライブ」です。

うららかな陽が射したかと思えば、一転して小雪混じりの寒風さえも吹きすさぶ土曜日の午後。「春は名のみ」のあいにくのお天気にもかかわらず、会場には約200名の方が詰めかけて歌とトークを楽しみました。



父・ヘキの思い出に声弾む榊原光裕さん(中央)



「タンポポヤマ」「ユキムシテブクロ」「ワシ」「アライヤマ」など、ヘキの歌を熱く歌った宗幸さん



急遽決まった榊原光裕さんの登場に、喜びのどよめきが

平成17年3月12日に開催されました。

大正から昭和にかけて、「日本詩人」などの雑誌で詩を発表した詩人・石川善助は、仙台における多くの詩誌の編集を手がけた。当館では、善助が大正十四年から翌年にかけて編集にかかわった詩誌「L.S.M.」全四号（大正十四年十月・十二月、大正十五年一月・二月）と、大正十一年から昭和五年にかけて、善助が詩人の郡山弘史に宛てた書簡を所蔵している。これらをお互いに読み解くと、当時の仙台の若き詩人たちの情熱や、彼らが目指したのが見えてくる。



郡山 弘史
1902(明治35)～1966(昭和41)
《「郡山弘史・詩と評論」より》



石川 善助
1901(明治34)～1932(昭和7)

森佐一の参加

誌面では、外部詩人の作品も歓迎したが、そのなかに、盛岡の詩人・森佐一の名前が見える。盛岡中学在学中の森は「北小路幻」の筆名で、すでに岩手県内では知られた詩人であり、宮沢賢治との交流も深めていた。善助は郡山に宛てて「北小路の小詩は実にすばらしい」（大正十三年十二月五日）と誉めている。森は合わせて五編の作品を寄せているが、その中の「鮎へ」（二二号）は賢治の詩を連想させる。「光のよどへいきたいの／私はおぼえてるよ／あの葎の葉がしげつてる／へんの水が／いちばん光をもつて明るいよ／葎の貌がたいへんあざやかで／あいつらが水鏡して水を美しく明らかにするのだよ。」

善助と宮沢賢治に交友があったことはつとに知られているが、仲介したのは森である。善助が「L.S.M.」刊行時期と重なる大正十四年十二月に、賢治を訪ねたことは指摘されているが、これまで日ごとの特定には至っていないかった。

善助が郡山にあてた書簡のなかに、次の一通がある。

「森佐一は、十二月廿四日盛岡で会いました。背のややかいややせた十九（今年）の中学生です。その思想もすっかりし、それに短歌を永くやっただけで国文

四人の同人

創刊号に名を連ねている主な詩人は、東北学院出身で後にプロレタリア詩人として活動する郡山弘史、同じく東北学院出身で、民謡・童謡・現代詩など幅広い作品を残した詩人・劉田仁と、英語教師の勤めの傍ら、児童運動にも関わった詩人・館内勇、そして石川善助である。奥付には、「仙台市土樋百三十番地 発行兼編集者 館内勇」とあるが、善助が郡山に宛てた書簡には「L.S.M.」の編集についてたびたび記されている。「L.S.M.」は劉田の原稿が来ないのでこままっている。でも明日あたり印刷の方へまわすのだ。本月号は十月になるのだ。すまない、ゆるして（大正十四年九月二十三日）「L.S.M.」は二三日中に出ます。校正もすみましたから、おくれたことを、許して下さい（大正十四年十月十九日）。

この詩誌は当初、A4版四頁の体裁でスタートし、その後六頁に充実した。この体裁は、善



館内 勇
1896(明治29)～1938(昭和13)
劉田 仁
1901(明治34)～1978(昭和53)

助が前年に発行した個人誌「航海」のそれとほぼ同じである。この共通点や、先ほどの書簡の記述から、善助も館内とともに、編集に携わっていたことが窺える。創刊号の刊行について、善助は「その夜、館内兄と二人で飲んだ。祝盃をかきね、詩をかたり、社会をかたり、夜街をあるいた。うれしかった。」（大正十四年十月二十七日）「四人の同人（注・石川・劉田・郡山・館内）でL.S.M.出して行くことを館内さんが非常に喜んで居ります（大正十四年十二月十日）」と

「書きたる文字は消滅せず」

創刊号の後記には「L.S.M.はラテン語 書きたる文字は消滅せず（注・Liere Scripta Manu）」の句の略であります」とある。このタイトルからは、雑誌と詩にこめる善助たちの思いを感じる事ができる。

タイトルをあしらった、シユールレアリスムを思わせる表紙画は郡山が描いた。善助は書簡で「その出来栄をみてほしい。兄の書いた表紙はすばらしく、この詩誌をたすけた。うれしい」（大正十四年十月二十七日）と謝辞を述べている。

誌面は、四人の作品が中心となって構成されているが、編集

書き送っている。この時期、郡山は朝鮮京城府立第一普通高等学校教師として京城に暮らし、住む地は異なりながらも、志を同じくする仲間同士で、雑誌を世に送り出したことを、素直に喜び、分かち合おうとする若者の心持が伝わってくる。

に徹している館内と善助の詩は各号一〜二篇の掲載となっている。この時期に仙台の師団に入営した劉田は、執筆の余裕がなかったのか、作品は創刊号の「葱」一編のみであるが、これは童謡詩人でもあった劉田の詩風をよく伝えている。

同人の中では、郡山が最も旺盛に作品を寄せている。創刊号から三号までは、毎回三編の作品が掲載されており、そのなかに「京城風物詩」と名づけた連作もある。プロレタリア詩人として知られる郡山だが、「L.S.M.」誌上の作品からは、まだその気配は感じられない。これら初期の作品は、郡山の長い詩作の軌跡を考える上で大切な位置を占めると思われる。



『L.S.M.』創刊号表紙

学もかなり、やります。有望なる詩人です。」（大正十五年一月十九日）

善助が賢治と会ったのは二十四日と推定されるが、書簡には賢治の名前は出てこない。賢治は当時無名であり、京城の郡山はその名を知らなかったのかもしれない。善助は、郡山との共通の知人である森のことを、書簡に記したのであろう。

「L.S.M.」は大正十五年三月で終刊する。「L.S.M.社」はその後しばらく存続していたが、善助は、詩人として立つために昭和三年に上京、郡山も同年に教職を辞して帰国、六年にプロレタリア作家同盟に参加する。劉田・館内は仙台で活動を続けていく。「L.S.M.」は、そこに集った詩人たちの後の様々な軌跡をたどる時、重要なステップと位置づけられるのである。

※石川善助の活動と、当時の仙台の詩壇の動きについては、藤一也「詩人石川善助 そのロマンの系譜」（昭和五十六年二月、萬葉堂出版）、木村健司「詩人石川善助資料」（三、昭和五十二〜五十三、私家版）に詳しい。

第7回

文学のある風景

佐伯一麦が見つめた鉄塔

この街に暮らしていれば誰の目にも飛び込んでくる大年寺山のテレビ塔が、作家にだけは特別な電波を送信したのだろうか。地上波デジタル放送に備えた新しいテレビ塔の建設が住まいの目の前で始まったとき、



工事期間の騒音はすさまじかった。だからこそ毎夕訪れる静寂が、とても大切なものと感じられた

「こんな間近で鉄塔工事を見続けられる作家も珍しいだろう」と佐伯一麦さんは定点観測を決意した。

「鉄塔家族」では、新しい鉄塔が建設されて古い鉄塔が撤去されるまでの、ほぼ1年間の四季の移り変わりや工事の進展を背景に、数十人にもなる登場人物が会い、あるいはすれ違う。身辺雑記のさりげなさを新聞連載は386回を数えた。

一麦という筆名は大好きなゴッホの作品に想を得たもの。そのゴッホは、自画像をさまざまな描き方、光の当て方で描いた。

「鉄塔家族」でも、そんな手法を試みた。登場人物の一人ひとりに、いろいろな方向から光を当ててみたかったのだという。

現場仕事のような規則正しきで執筆は続いた。早朝から机に向かい、日が沈む前には1日分を書き上げ、新聞社に送信した。1日3枚。急ぎもせず遅れもせず、足場を一步一步登っていくように稿を重ねた。

職人が1日の終わりにするよ

うに丁寧に道具を仕舞い、夕暮れの独酌を愉しみとする。作家のそんな1年を鉄塔もまた、見ていただろうか。(T)



鉄塔を見つめ続けたつもりが、実は鉄塔に見られ続けていたのではないかと思うこともある

「鉄塔家族」(日本経済新聞社) 日本経済新聞夕刊に、2002年7月29日から2003年11月15日まで連載された。2004年、第31回大佛次郎賞受賞



自宅のリビングに飾ってあった、草木染め作家である妻・神田美穂さんの作品。第1エッセイ集「蜘蛛の巣アンテナ」(講談社)の装画に使われた

